

応援歌

誓ひの殿堂・あゝ中央の若き日に・中大健児の歌

一九三一（昭和六）年四月二十九日朝来の雨の中、早稲田大学の戸塚球場において永田秀次郎東京市長の始球をもって五大学野球リーグ発会式が挙行された。のちの東都大学野球連盟リーグ戦の始まりである。これに先立って一ヵ月ほど前に、予科生を中心に応援団が組織された。その初応援が、この日午後の対専修大学戦（於田園調布球場）で「若人・学生の意気高く」練り広げられた二〇〇余人による力援であった。このとき歌われたのが本学初の応援歌、正確には野球応援歌の「誓ひの殿堂」であった。

これまで運動会などで応援に歌われていたのは、もちろん校歌であったが、野球部では、発足して間もない三〇年に懸賞付きで一般から募集して作った「誓ひの殿堂」があった。これは在学生の和田芳恵（直木賞作家、一九〇六―七七）が書いて入選した詞に、新進作曲家の諸井三郎（一九〇三―七七）が曲をつけたもので、「若

き血潮みなぎる中央の意気に見よ 栄光は燦として我らがうへにあり 謳わずや新興中央」というものであった。いつしか「新興中央」の部分は、本学全体の応援歌にふさわしくするためであるうか、「伝統中央」と変えて歌われるようになった。

この応援歌は校歌とともに「荘重にして優美、典雅にして、爽快、我が中大の面目を充分に發揮」するべく、誕生したばかりの音楽会によって暮れにレコード化され、翌三一年三月「日本コロムビア」から全国一斉発売が決まったと『中央大学々報』に見える。

戦後間もない四六年六月、「五〇〇人の団員」を擁する大応援団の結成式が大講堂で挙行された。これは四八年には、予科、専門部、大学と交錯していたため整理・再編されることになるが、再編と同時に新応援歌の募集も行われた。同年六月二十一日、再発足と新応援歌発表会が大講堂で盛大に行われる。

これを伝える『中央大学新聞』二七一号は、「作曲古閑裕而……新応援歌 あゝ中央の若き日に」として「あこがれ高く空広く理想の日光彩なせる あゝ中央の若き日に」と歌い出し、「力 中央 中央」と締める学友会選定の歌詞を二段抜きで掲載した。この詞は学生山崎某の応募詞を学友会が大幅に補作したものという。曲は、当時予科三年生で予科応援団長であった鈴木務が、古閑に作曲を懇請してでき上がったものであった。発表当日は歌手の伊藤久男が歌い上げ、後に伊藤と本学合唱団によるレコード化がなされた。



『誓ひの殿堂』録音中の音楽会員

五二年六月三十日、折しもヘルシンキオリンピックに本学関係選手・コーチが発出するという記事をトップにする『中央大学新聞』に、「新応援歌募集」の広告が出された。―応援団では学友会後援のもとに、新応援歌を一般学生及び先輩か

ら募集することになったので多数の応募を望む、その詩は「独立後の大学にふさわしい覇気に満ちたもの」で、行進曲風のを期待していると記している。審査員には林頼三郎学友会会長以下、青木得三文化部長など学友会幹部九人の名が挙がっている。

この募集でできたのが「中大健児の歌」である。作詞は応援団員の河尾俊雄、作曲は音楽研究会の鈴木大八郎であった。この歌は河尾が応援団に所属していたことや、賞金を監督と相談して福祉施設に寄付したことで話題となった。しかし、本人は流行の「自由」「文化」「自治」などに、応援歌らしく「情熱（ねつ）」「力」「伝統」などの言葉をちりばめて「一週間程でデッチ上げ」たものだったため、その年秋の大学祭で行われた新応援歌発表会でリーダーを務めたときには、「嬉しさより恥ずかしさ、面映ゆさにポーツとして手足が真面目に動いたかさえ覚えなかった」と回想している。

これら「誓ひの殿堂」、「あゝ中央の若き日に」そして「中大健児の歌」という本学の三つの応援歌は、校歌とともにスポーツ応援の現場や入学ガイダンス期の応援団の歌唱指導を通じて普及が図られ歌われてきた。